

## 1. 当期の概況



当期の我が国経済は、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて大幅に悪化しました。感染拡大防止と経済活動の両立を図る中で、景気は回復傾向にあります。感染再拡大の兆候も見られ、依然として先行きは不透明な状況にあります。海外経済は、中国では2020年2月半ばから経済活動が再開しており、インフラ投資や不動産開発投資が堅調に推移しました。中国以外の地域も景気は大幅に悪化しましたが、徐々に持ち直しの動きがみられています。

このような経済環境のもと、当社グループも自動車や航空機、建築向けを中心に売上高の大幅な減少を余儀なくされる中、収益の確保に向けて、固定費の圧縮などの緊急収益改善や素材系事業を中心とした収益改善に最大限取り組んでまいりました。

この結果、当期の売上高は、前期に比べ1,642億円減収の1兆7,055億円となり、営業利益は、新型コロナウイルス感染症の影響により販売数量が大きく減少したものの、鉄鋼アルミ、素形材、建設機械を中心に緊急収益改善を含むコスト削減に取り組んだこと、電力事業における真岡発電所の稼働や冬場の電力需給ひっ迫への対応などにより、前期に比べ205億円増益の303億円、経常損益は前期に比べ242億円改善の161億円の利益となりました。特別損益は、減損損失を計上した一方、固定資産売却益などを計上し25億円の利益となり、親会社株主に帰属する当期純損益は、前期に比べ912億円改善の232億円の利益となりました。

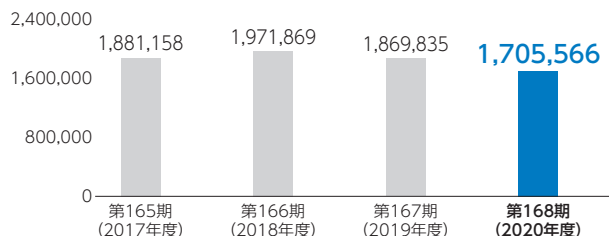
当社は、配当につきましては、継続的かつ安定的に実施していくことを基本としつつ、財政状態、業績の動向、先行きの資金需要等を総合的に考慮して決定することとしております。これに基づき当期の期末配当につきましては、1株につき10円とすることを決議いたしました。

## 2. 業績ハイライト (連結)

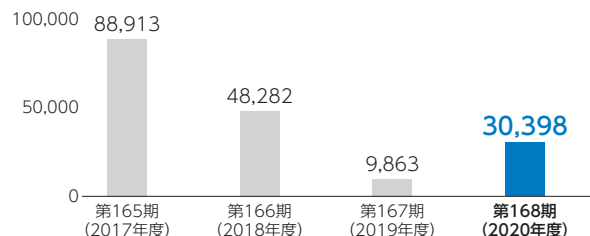
区 分	第165期 (2017年度)	第166期 (2018年度)	第167期 (2019年度)	第168期 (2020年度)
売上高 (百万円)	1,881,158	1,971,869	1,869,835	1,705,566
（うち海外売上高）	648,527	713,942	653,853	573,685
営業損益 (百万円)	88,913	48,282	9,863	30,398
経常損益 (百万円)	71,149	34,629	△8,079	16,188
親会社株主に帰属する当期純損益 (百万円)	63,188	35,940	△68,008	23,234
1株当たり当期純損益	174円43銭	99円20銭	△187円55銭	64円05銭
総資産 (百万円)	2,352,114	2,384,973	2,411,191	2,582,873
純資産 (百万円)	790,984	803,312	716,369	769,375
1株当たり純資産	2,049円95銭	2,041円29銭	1,811円10銭	1,958円57銭

(注) 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第166期の期首から適用しており、第165期の総資産の金額については、当該会計基準等を遡って適用した後の金額となっております。

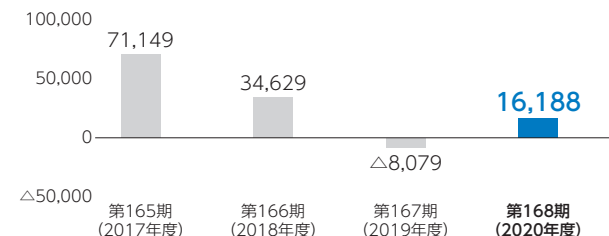
### 売上高 (百万円)



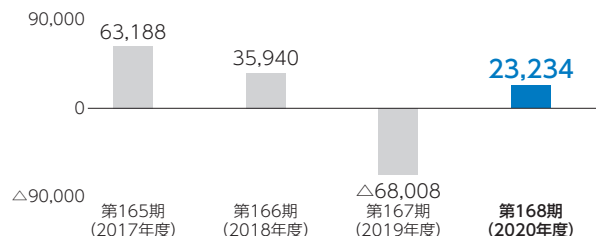
### 営業損益 (百万円)



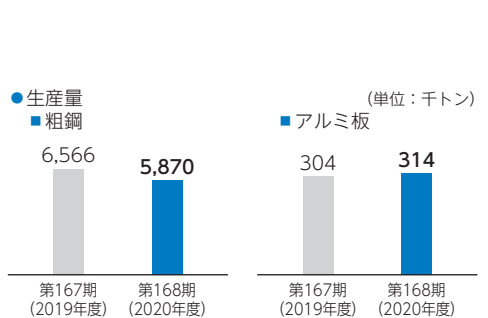
### 経常損益 (百万円)



### 親会社株主に帰属する当期純損益 (百万円)



### 3. セグメント別業績



(注) 粗鋼には高砂製作所の電炉の生産数量を含めております。

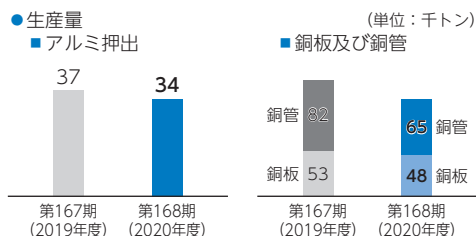
(鉄鋼)  
鋼材の販売数量は、自動車向けをはじめとして需要が全般的に減少したことから、前期を下回りました。販売価格は、主原料価格の下落や輸出価格の低迷などの影響を受け、前期を下回りました。

この結果、当期の売上高は、前期比13.3%減の5,638億円となりました。経常損益は、固定費の削減など緊急収益改善策を実施したものの、販売数量の減少の影響を大きく受け、前期に比べ145億円悪化の233億円の損失となりました。

(アルミ板)  
アルミ板の販売数量は、自動車向けの需要が減少したものの、飲料用缶材向けが堅調に推移したことに加え、IT・半導体向けのディスク材やアルミ厚板などが増加したことから、前期を上回りました。

この結果、当期の売上高は、前期並の1,324億円となりました。経常損益は、飲料用缶材向けの拡販やコスト削減により、前期に比べ83億円改善の6億円の利益となりました。

鉄鋼アルミ全体では、当期の売上高は、前期比10.8%減の6,963億円となりました。経常損益は、前期に比べ61億円悪化の226億円の損失となりました。



素形材の販売数量は、自動車向け需要の減少の影響が大きく、サスペンションやアルミ押出、銅板、鉄粉などで前期を下回りました。航空機向けや一般産業向けのチタン、造船向けの鋳鍛鋼においても同様に、販売数量が前期を下回りました。

この結果、当期の売上高は、前期比19.9%減の2,381億円となりました。経常損益は、前期に計上した固定資産の減損に伴う減価償却費の減少やコスト削減の効果などにより、前期に比べ131億円改善の121億円の損失となりました。

## 溶接



売上高

**700億円**

前期 837億円  
(前期比△16.4%)

経常  
損益

**17億円**

前期 29億円  
(前期比△39.4%)

溶接材料の販売数量は、国内では自動車や建設機械向けなどの需要が減少し、前期を下回りました。海外でも東南アジアなどでの自動車向け需要の減少や、造船向け需要の低迷などにより、前期を下回りました。

この結果、当期の売上高は、前期比16.4%減の700億円となり、経常利益は、前期に比べ11億円減益の17億円となりました。

## 機械



売上高

**1,753億円**

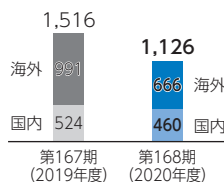
前期 1,659億円  
(前期比 +5.7%)

経常  
損益

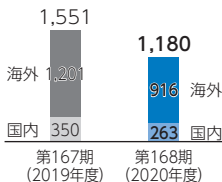
**114億円**

前期 96億円  
(前期比 +19.1%)

●受注高



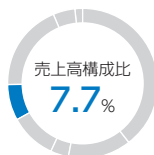
●受注残高 (単位: 億円)



当期の受注高は、新型コロナウイルス感染症の影響による設備投資の圧縮・繰り延べを背景に、産業機械・圧縮機ともに減少したことから、前期比25.7%減の1,126億円となり、当期末の受注残高は1,180億円となりました。

当期の売上高は、前期に受注が好調であったLNG船向けや石油化学向けの圧縮機を中心に計上し、前期比5.7%増の1,753億円となりました。経常利益は、コスト削減の効果などもあり、前期に比べ18億円増益の114億円となりました。

## エンジニアリング



売上高

**1,361億円**

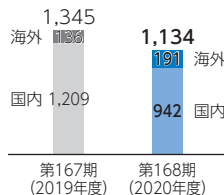
前期 1,415億円  
(前期比 △3.8%)

経常  
損益

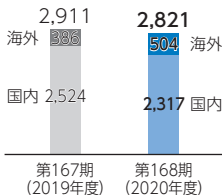
**44億円**

前期 57億円  
(前期比△22.9%)

●受注高



●受注残高 (単位: 億円)



当期の受注高は、水処理関連事業及び廃棄物処理関連事業で大型案件の受注があった前期比15.7%減の1,134億円となり、当期末の受注残高は2,821億円となりました。

当期の売上高は、新型コロナウイルス感染症の影響に伴う海外案件の工期後ろ倒しなどにより、前期比3.8%減の1,361億円となり、経常利益は、前期に比べ13億円減益の44億円となりました。

(注) (株) 神鋼環境ソリューションの水処理/ごみ処理等に関する長期運転維持管理業務について、従来は売上時点で受注高として集計していましたが、当期より契約の受託時点で受注高として集計する方法に変更しております。これに伴い、前期の受注高を受託ベースで再集計し、比較しております。

## 建設機械



売上高

**3,331億円** ↘  
前期 3,608億円  
(前期比 △7.7%)

経常  
損益

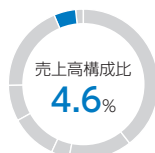
**127億円** ↗  
前期 75億円  
(前期比 +69.6%)

油圧ショベルの販売台数は、国内では、台風19号の影響で部品供給が滞ったことにより、販売が減少した前期を上回りました。中国では、インフラ投資などの経済政策による需要拡大により販売台数は増加したものの、欧州、東南アジアでは、新型コロナウイルス感染症の影響などにより販売台数が減少したため、海外での販売台数は前期を下回りました。結果、全体の販売台数は前期並となりました。

クローラークレーンの販売台数は、新型コロナウイルス感染症の影響により、国内、海外ともに前期を下回りました。

この結果、当期の売上高は、前期比7.7%減の3,331億円となりました。経常利益は、コスト削減などにより、前期に比べ52億円増益の127億円となりました。

## 電力



売上高

**804億円** ↗  
前期 756億円  
(前期比 +6.3%)

経常  
損益

**206億円** ↗  
前期 89億円  
(前期比 +130.8%)

販売電力量は、2019年10月に真岡発電所1号機、2020年3月に真岡発電所2号機が稼働したことや、冬場の電力需給ひっ迫に伴い送電量を増加させたことなどにより、前期を上回りました。

この結果、当期の売上高は、前期比6.3%増の804億円となりました。経常利益は、真岡発電所の稼働や、冬場の電力需給ひっ迫への対応などにより、前期に比べ117億円増益の206億円となりました。

## その他



売上高

**278億円** ↘  
前期 336億円  
(前期比 △17.4%)

経常  
損益

**42億円** ↗  
前期 33億円  
(前期比 +27.0%)

当期の売上高は、前期比17.4%減の278億円となり、経常利益は、(株)コベルコ科研における固定費の削減などにより、前期に比べ8億円増益の42億円となりました。

(注) 1. 受注高・受注残高には、当社グループ間での受注の額を含んでおります。

(注) 2. 当社グループの売上高には、調整額△517億円を含んでおります。なお、売上高構成比は、調整額を除いた各事業の売上高の合計をもとに算出しております。

(注) 3. 2020年4月1日付で、「鉄鋼事業部門」と「アルミ・銅事業部門」を、素材(鉄鋼アルミ)を扱う「鉄鋼アルミ事業部門」と部品(索形材)を扱う「索形材事業部門」に組織を改編いたしました。